様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２６９２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ２０７７５

研究課題名（和文）外来化学療法を受ける再発乳がん患者の多重症状の緩和に向けた看護プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a program to alleviate multiple symptoms in recurrent breast cancer outpatients receiving chemotherapy

研究代表者
浅海　くるみ（ASAUMI, Kurumi）

東京工科大学・医療保健学部・助教

研究者番号：９０７３５３６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、外来化学療法中の再発乳がん患者の多重症状の緩和に向けた看護プログラムの作成を目的とした。研究方法は、外来看護師6名と訪問看護師7名に個別の半構造化面接を実施した。面接の結果から、外来化学療法を受ける再発乳がん患者の多重症状の緩和に向けた看護プログラムの構成要素は、1.「症状緩和」と「予後を見据えた支援」を同時並行的に実施すること、2.終末期ケアに関する外来看護師向けの教育を充実させること、3.外来と在宅の看護連携の促進に向けた情報共有ツールやシステムを整備することであると考えた。今後は、看護プログラムを具体的に運用するための検証が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
在院日数の短縮化に伴い、化学療法を受ける場は入院から外来へ移行している。特に、転移再発による化学療法を受けるがん患者は、複数の症状による心身の負担感の増大に加え、人生の最終段階の治療やケアの選択という厳しい問題と向き合う必要があるため、外来看護師に求められるケアは高度かつ複雑になっている。そのような課題に対し、早期から訪問看護を導入することの有効性が示唆されているが、その実態は明らかにされていない。本研究は、化学療法中の再発乳がん患者の多重症状の緩和に向けた外来看護および訪問看護の実践と実践上の困難を明らかにし、病院と在宅のシームレスな連携を見据えた看護の体系化に向けた成果を得た。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a nursing program to alleviate multiple symptoms in breast cancer outpatients undergoing chemotherapy. The research method consisted of semi-structured interviews conducted one-on-one with six outpatient nurses and seven home-visit nurses. The results indicated that the components of such a program should include (1) the simultaneous implementation of “symptom relief” and “support in anticipation of the prognosis,” (2) the full enhancement of education for outpatient nurses in end-of-life care, and (3) the implementation of systems and information-sharing tools that promote coordination between outpatient and home-visit nurses. Further investigations on the specifics of how to operate such a nursing program are required.

研究分野：がん看護

キーワード：外来化学療法　転移・再発がん　多重症状　外来看護師

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

がん診療連携拠点病院の院内がん登録データによると、乳がん全体の 5 年相対生存率が約 93%と高率である一方、Ⅳ期と診断された患者の相対生存率は 35.6%であることが報告されており、転移や再発を来した乳がん患者の予後は依然として厳しい。延命や症状緩和を目的とした化学療法を受ける再発乳がん患者は、緩和ケア主体の医療への転換期を間近に控えたなかで、がんの進行に起因した症状に薬物治療の有害事象が加わり、複数の症状を同時に抱えることで身体的機能および Quality Of Life(以下、QOL）の低下が明らかとなっている（So WK., et al. Oncol Nurs Forum 2009; Kim HJ., et al. Cancer Nurs 2014）。具体的には、患者は、複数の症状により症状の負担感が増すことで、症状の理解力や統制力が低下するという実態が報告されている (Kenne SF., et al. J Pain Symptom Manage 2014) 。

一方、日本の現状は、医療制度改革による在院日数の短縮化に伴い、外来診察の場面で、がん告知だけでなく、がんの再発や進行、抗がん剤治療の中止などの「悪い知らせ」を伝えるケースが増加している。そのため外来看護師は、それらの「悪い知らせ」を受ける患者と家族の診察室内の様子に目を配り、場合によっては、診察の後で患者と家族の気持ちを聴き、医師の説明を補足するなどの対応が求められる。これらのことから、転移再発による薬物療法を受けるがん患者は、治療を中止し、終末期に差し掛かるなか、複数の症状により心身の負担感が増した状況下で、人生の最終段階の治療やケア、療養場所の選択などの新たな問題と向き合わなければならないため、外来看護師は、高度かつ複雑なケアが求められると考えた。しかしながら、医療法に基づく外来看護師の配置基準は、外来患者 30 名に対して看護職員 1 名と、1948 年以降変わっていないため、外来看護師への負担は大きいものと推察されるが、その詳細は明らかにされていない。

他方で、外来化学療法を受けているがん患者に対して早期から訪問看護を導入することで患者の症状の安定化に良い影響を与えるという報告（山瀬ら., 日がん看護, 2014）もあり、外来化学療法を受けるがん患者の症状マネジメントに訪問看護師の役割が大きいことも推察された。しかし、外来化学療法を受ける転移再発がん患者の外来と在宅の連携に着目した調査は数少ない。

そこで、本研究は、化学療法中の再発乳がん患者の多重症状の緩和に向けた外来看護および訪問看護の実践と実践上の困難を明らかにし、病院と在宅のシームレスな連携を見据えた看護の体系化を目指すという着想に至った。

２．研究の目的

外来化学療法を受けている転移・再発乳がん患者の多重症状を緩和するための看護プログラムを作成することを目的とした。

３．研究の方法

(1) 研究デザイン

質的記述的研究

(2) 調査実施期間

① 調査Ⅰ：2017 年 5 月～2018 年 2 月
② 調査Ⅱ：2020 年 1 月～2020 年 3 月

(3) 研究対象者

① 調査Ⅰ：都内にある 2 施設の乳腺外科外来あるいは外来化学療法室に勤務する看護師
② 調査Ⅱ：都内にある 3 施設の訪問看護ステーションに勤務する訪問看護師

(4) 研究対象者のリクルート方法

研究の概要、研究への参加を依頼する内容、研究代表者の連絡先を記載したポスターを外科外来あるいは訪問看護ステーションの休憩室に掲示し、対象者をリクルートした。研究代表者は、研究の参加希望者から連絡を受けた後、双方の都合の良い日時に、研究の概要について口頭及び文書で説明し、文書で研究参加の同意を得た。

(5) 調査内容および調査方法

① 調査Ⅰ：対象者の年齢、看護師としての勤務歴、外来看護師としての勤務歴、職位等の情報を得た。そして、外来化学療法中に複数の症状を生じた再発乳がん患者の事例を 1～2 例挙げていただき「事例患者の病状や治療の経過」「実践した看護の内容とその意図」「実践した看護のなかでうまくいったと感じた内容とその理由」「実践のなかで困難に感じた内容とその理由」について自由な語りを促した。面接は、対象者の勤務先の個室で行い、対象者の許可を得て録音した。

② 調査Ⅱ：対象者の年齢、看護師としての勤務歴、訪問看護師歴としての勤務歴、職位等の情報を得た。そして、外来化学療法を受けながら訪問看護の利用している再発がん患者の事例を 1～2 例挙げていただき「事例患者の病状や治療の経過」「実践した訪問看護の内容とその意図」「実践した訪問看護のなかでうまくいったと感じた内容とその理由」「実践のなかで困難に感じた内容とその理由」について自由な語りを促した。面接は、対象者の勤務先の個室で行い、対象

者の許可を得て録音した。

（6）分析方法
調査Ⅰおよび調査Ⅱともに、以下の方法により、質的帰納的に分析した。
① 面接の内容を逐語録とし、対象者の看護実践および実践上の困難が表れている部分を意味内容ごとに区切り、意味単位を定め、簡潔な表現に変換した。
② それぞれの意味単位を、内容の類似性に沿って、分類整理し、各まとまりを簡潔な一文で表現し、≪コード≫を定めた。
③ ≪コード≫の共通性を検討し、＜サブカテゴリ＞を導き、【カテゴリ】へ統合した。

（7）倫理的配慮
本研究は、調査Ⅰおよび調査Ⅱともに、研究代表者の所属施設および調査実施施設における倫理審査委員会で承認を受け、実施した。研究代表者は、研究協力の希望を意思表明された対象者に対し、「研究の背景・目的・方法・データ保管方法・予測される結果（利益・不利益）・研究協力の任意性と撤回の自由・個人情報の保護」等について、説明文書および口頭で説明し、同意書に署名いただいた。また、調査は、対象者の希望する日時およびプライバシーの確保できる場所で行い、対象者の心身に負担がかからないよう十分に配慮した。

４．研究成果
（1）対象者の概要
① 調査Ⅰ
対象者は、女性 6 名であり、看護師経験年数は 6 年から 34 年、外来での臨床経験年数は 2 年から 10 年、2 名は認定看護師の資格を有していた。各対象者に 1 回の面接を実施し、総面接時間 295 分であった。
② 調査Ⅱ
対象者は、女性 7 名であり、看護師経験年数は 6 年から 30 年、訪問看護師の経験年数は、2 年から 11 年、1 名は認定看護師の資格を有していた。各対象者に 1 回の面接を実施し、総面接時間 349 分であった。

（2）個別面接調査の結果
① 調査Ⅰ
化学療法中に多重的な症状を抱えた転移・再発乳がん患者の外来看護の実践と実践上の困難は、以下の通りであった。外来看護師は、≪診察までの待ち時間に患者に生じた身体症状を網羅的に把握する≫≪対応すべき症状の抽出と介入方略の見極めを連動する≫など【自宅療養の継続に向けて優先すべきケアを整理する】実践を心掛けていた。しかし、≪予備力の低下した再発がん患者の急変兆候を読み取ることが難しい≫≪慢性化した症状に慣れ、我慢する患者の苦痛を正確に把握できない≫と【心身ともに脆弱化した患者の急変を予測しにくい】と感じていた。他方で、≪再発告知から死を意識する時期にある患者とその家族へのケアが難しい≫≪悪い知らせを受けた患者との対峙に戸惑う≫など【人生の最終段階の医療・ケアという予後を見据えた意思決定支援に困難さ】を抱いていることが明らかとなった。さらに、≪訪問看護ステーションとの具体的な連携の進め方が分からない≫≪患者・家族を介した情報共有しかできていない≫など外来通院患者の在宅療養の継続を念頭に置いた看護において、【訪問看護との連携は手探り】である実態が明らかとなった。
② 調査Ⅱ
外来化学療法中に多重的な症状を抱えた転移・再発がん患者の訪問看護の実践と実践上の困難は、以下の通りであった。訪問看護師は、≪日々のケアを通して患者の身体症状の変化を予測する≫≪現在の症状に最適なケア方法を患者・家族と共有する≫など【身体症状の機微を捉えてケア方法を最適化する】実践を心掛けていた。また治療が奏功しなくなった段階では、≪予後を見据えた踏み込んだ問いかけにより療養者・家族の意思を確認する≫≪治療にすがりたい療養者・家族の気持ちを受け止める≫など【療養者・家族の揺らぐ気持ちを受け止め、覚悟を支える】実践をしていた。一方で、≪患者や家族を介した外来との連携にタイムラグが生じる≫≪外来化学療法室の窓口が分かりにくい≫など【外来との連携が取り辛い】という実践上の困難も明らかとなった。

本研究の結果より、外来看護師と訪問看護師の実践内容の共通点は、化学療法中の転移・再発乳がん患者の多重症状の緩和は、「症状緩和」と「予後を見据えた支援」を切り離さず、同時並行的に実施していることが考えられた。また、外来看護師と訪問看護師はともに、「複数の身体症状」を網羅的に把握し、症状の変化に応じた対処方法を編み出すことで、在宅療養期間の継続を支援しており、多重症状の安定化に向けたケアを緻密に展開していることが考えられた。
一方で、「予後を見据えた支援」において、訪問看護師は、患者個々の予後を見据え、踏み込んだ問いかけをする一方、外来看護師は、予後を見据えた意思決定支援に困難さを抱いていた実態もあった。その理由は、がん患者は、最期の数週間で急速に全身状態が悪化するという特徴的な軌跡を辿るため、最期の治療や療養への意向を確認する「終末期の話し合い」の外来での実施

が十分でないことが推察された。しかし、昨今、治療の場が外来へ移行し、外来での悪い知らせの告知場面が益々増加することが予測されるなかで、外来看護機能の強化は必要不可欠と考える。具体的には、外来看護師は、患者の病状の進み具合を見通しながら、「再発転移の告知」の場面から継続して「終末期の話し合い」に関与し続ける役割が求められると考察した。以上のことから、終末期ケアに関する知識やコミュニケーション技術の習得を目的とした外来看護師向け教育を充実させることが必要だと思われる。

しかしながら、外来看護師の配置基準は、外来患者 30 名に対して看護職員 1 名という現状のなか、外来看護師のみで診療の補助業務に加え、患者が自宅での生活を続けるためのセルフケア教育、最期の療養の場の調整を含めた患者・家族の意思決定支援を十分に実施することは時間的に厳しいことも予測される。そこで、外来看護師が抱いていた心身ともに脆弱化した患者の急変予測の難しさに対応していくためにも、早期から訪問看護を利用することを推奨することが一つの方略になると考える。患者が短期間でも訪問看護を利用することで、外来看護師と訪問看護師がタイムリーに情報共有し症状の悪化を未然に防ぎ、患者の生活の中で症状マネジメントの方法を考えることで、患者の安定した在宅療養を最大限延長させられるのではないかと考える。

本研究の結果では、外来看護師、訪問看護師ともに互いの連携上の課題を感じていることが明らかとなった。なかでも、患者・家族を介した情報共有にとどまっていることから、外来看護師と訪問看護師の持ち合わせている情報をタイムリーかつ正確に共有できない実態、つまり情報共有の方法における課題が浮き彫りとなった。外来化学療法を受けながら在宅での生活に支援が必要な患者は、がんによる症状に加えて化学療法の有害事象という多重的な症状を抱えており、心身ともに非常に脆弱な状態と言える。そのため、いつ急変してもおかしくない状況があるため、患者の安定した在宅療養の継続において、外来看護師と訪問看護師のタイムリーな連携は不可欠と言える。以上のことから、外来看護師と訪問看護師の具体的な情報共有方法の明確化、情報共有ツールやシステムの整備などが求められると考える。また、外来看護師と訪問看護師のカンファレンスの実施に対する診療報酬上の評価を検討することも一案と思われた。

以上の結果から、外来化学療法を受ける再発乳がん患者の多重症状の緩和に向けた看護プログラムの構成要素は、1.「症状緩和」と「予後を見据えた支援」を同時並行的に実施すること、2.終末期ケアに関する外来看護師向けの教育を充実させること、3.外来と在宅の看護連携の促進に向けた情報共有ツールやシステムを整備することであると考えた。今後は、看護プログラムを具体的に運用するための検証が必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 浅海くるみ、村上好恵	４．巻 37
２．論文標題 外来化学療法を受ける転移再発乳がん患者に生じる複数の症状の主観的体験と対処に関する質的研究	５．発行年 2017年
３．雑誌名 日本看護科学学会誌	６．最初と最後の頁 417～425
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5630/jans.37.417	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 浅海くるみ、村上好恵
２．発表標題 外来化学療法を受ける転移再発乳がん患者の症状クラスターの主観的体験と対処に関する研究
３．学会等名 第32回日本がん看護学会学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 浅海くるみ、村上好恵
２．発表標題 外来薬物療法中に多重的な苦痛を生じた転移・再発乳がん患者への看護実践および実践上の困難に関する研究
３．学会等名 第34回日本がん看護学会学術集会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考